

いくるより死ぬるまで。清水にひたされて。その身は肥えぬへく。人はわかきより老ゆるまで。賢人に化せられて。その性は長じぬべし。人の徳を修め。藝を學ぶ。この養なくば。あるへからず。故にかしこきに交らんは。正蘭の室にあるがとく。久しくして。その香をきかす。きうざるは。その身のかしこきに化りぬるなりともいへり。その身既にかしこきにうつりて。そのよきを覺えぬは。人の氣中にありて。氣を覺えず。魚の水中にありて。水を覺えぬがごとし。是を身を君子の水に涵し。心を正蘭の室に養ふとやいふべからん。藝も徳も。なごか成就せざらんや。されども。一朝にして得べきにあらず。長く月日を重ねて。その効はみゆへし。急くへからず。徳性なごハ尤もこの養ひなくハ。叶ふまじ。かれ徳性を養ふに。涵養のもじを用ひたる。古人の意深し。

物事の沿革と窮むへき話

全

人ぎえつけんどおもはゞ。はやくより。いさゞげなる物事なりとも。そのすぎこし方の沿革を。あなぐりて。んどの心。ふりおこすべし。藝業のその身につく。これよりは。やきはなかるべし。その索ぐることの。よく知らるゝのみにあらず。これによりて。かの事。この事。明になりぬること。五も六も。ありぬべし。たとへば。中國すぢの寄港船にのりて。九州に下るかどくなるべし。神戸を出て。門司の港にはてんは。その志さす所なり。これによりて。安藝の宮嶋にも。たちよるべく。周防の岩國も。見わたさるべし。一の沿革を。みんとて。百の沿革を。まゐる。こゝに至りては。その物その事。皆おのか物となり

ぬへし。人の物にはあらじ。身を終ふるまで。心かくへし。忘るべからず。

閑居の樂（今様）

禾の舎あるじ

ふりもせず、くもりもはてぬ春の日の花をやしなふうすがすき、棚ひくゑたの窓あかく、文机きよくうちはらひ、まらぬむかしの水莖の、あとかきうつし塵の世の、心を洗ふ友として、長閑にくらすたのしみに、易ふべきものは天地の間になにかあるべきと、れもへはいつしうもろこしの、獨樂園のあるじとぞ、やがてわが身もなりにける。

丙申の春彌生の盡日

學生森寺綏來の身まかりける時その靈前に黙誦しける

禾の舎あるじ

教へこし心つくしのなみた川みなわとなりぬ君いかにせむ

花下言志

さく花の盛みせばや數ならぬこの身も後の名こそ惜しけれ

雲雀

窪田常吉

霞たつ空にはのめくやまよりものはのかに見えて雲雀なくなり

文苑

五十五